

介護福祉学科同窓会の設立背景・過程と今後の展望

Backgrounds, Process and Future prospects on the Alumni Association of Department for Training of Certified Care Workers in Matsumoto Junior College

福田 明
Akira FUKUDA

はじめに

以下は、歌手の古内東子氏が作詞・作曲した"Beautiful Days"(2005年6月29日)の冒頭部分である。暗い話題が多い昨今、人と人とのつながりを大切にすること、希望をもつことの素晴らしさを改めて感じさせてくれる歌になっている。

大事なものが どんどん 増えていく
ひとつ ひとつ 守ってく
明日には 今日より 光が見える

筆者が松本短期大学介護福祉学科の教員となって4年目の2009年4月、介護福祉学科同窓会が誕生した。実は、それまで松本短期大学同窓会は存在していたものの、各学科の同窓会組織はなく、介護福祉学科卒業生による同窓会活動は行われていなかった。他大学・短大では、同窓会組織のなかに学科別同窓会や地域同窓会、ゼミ同窓会などが組織され、それぞれの事業計画に沿って活動が行われていることが多い。1993年に全国の大学・短大で初めて「介護福祉学科」という名称で開設認可された本学介護福祉学科の卒業生は、現在、約1500人にのぼる。今後も、同じ短大・同じ学科で学び、国家資格である介護福祉士を取得した(取得を目指す)、いわば同志が増えていく。にもかかわらず、互いが交流・協力し合う組織が存在しなかったことは不思議といえば不思議であった。

本稿では、①介護福祉学科同窓会の設立背景を述べ、②教員でもある筆者が介護福祉学科4期生として、介護福祉学科同窓会設立に向けて他の卒業生などどのような取り組みを行ってきたのか、その過程を紹介する。③その上で、介護福祉学科同窓会の今後を展望したい。

1. 介護福祉学科同窓会設立の背景

以下、介護福祉学科同窓会設立に向けて動き出した背景について2点述べる。

1. 母校介護福祉学科をとりまく状況と卒業生の思い

いつの時代でも、先輩あるいは後輩が素晴らしい

活躍をする、あるいは名誉ある賞を受ける、そして人のため世のために尽くして有名になることは喜ばしい。また、そのような先輩や後輩を輩出する母校が発展していくことは、在校生だけでなく卒業生や関係者にとっても嬉しい限りである。

しかしながら、本学介護福祉学科をとりまく状況は、決して楽観視できない。図1を見てもわかるとおり、2009年度は入学生が2008年度のそれと比べ10人増加したものの、ここ数年間は、入学生が減少傾向にある。良い人材を育てるにしても、まずはその人材が入り口としての本学介護福祉学科に集わなければどうしようもない(ただし、2009年度入学生の充足率は75.0%となっており、これは全国の介護福祉士養成校の55.1%に比べ、約20%ポイントも高い¹⁾)。

本学介護福祉学科教員は、こうした状況に危機意識をもつ。それゆえに、昨今、尾台安子学科長の下、本学と介護福祉学科のために様々なPR活動を展開している。例えば、「高校への出前介護教室(随時)」「高校に向けての短大PRポスター作成(2007年～)」「学園祭での教員による介護劇-認認介護もすてたものではない(2008年10月4日)」「公共職業安定所(ハローワーク)への社会人入学の呼びかけ・チラシ配布(2009年)」「地域住民への各種講習会の開催(例:「福祉・介護チャレンジ教室」2009年10～11月)」である。

ただし、こうした教員(一部は在校生を含む)の努力だけで、本学介護福祉学科の入学生が増加するほど、簡単な問題ではない。幸いにも、本学介護福祉学科には卒業生が毎日のように訪れ、「今年は何人入学したの?」「介護福祉学科は大丈夫なの?」と、卒業生自身も入学生の減少と今後の介護福祉学科を心配してくれる。そのなかには、介護福祉学科の同窓会長となった柳沢佳澄氏(介護福祉学科1期生)や理事となった有賀裕幸氏(介護福祉学科4期生)もいた。彼らは、介護福祉学科同窓会設立以前から「介護福祉学科のために何か力になれることがあれば、遠慮せずに伝えて」「お金とかいらぬから、ゼミや授業でゲスト講師の依頼があれば行くよ」と頼もしい言葉を発してくれていた。

こうした母校介護福祉学科の危機的状況を見過

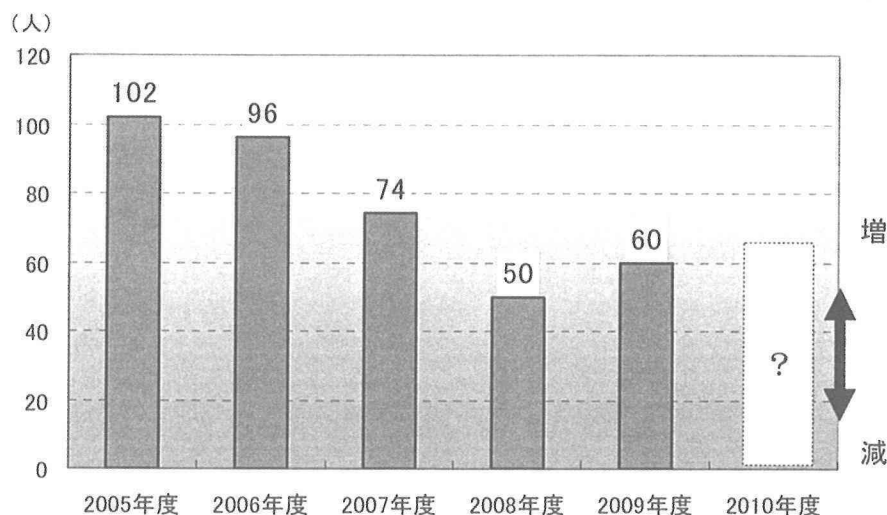


図1 本学介護福祉学科における過去5年間の入学生数の推移

ごすことができない、多くの卒業生の思いが、介護福祉学科同窓会設立を後押しする一因となったことは間違いない。

2. 卒業生同士と卒業生と在校生とのつながりの必要性

冒頭で述べたように、本学介護福祉学科の卒業生は約1500人となり、ますます卒業生同士のつながりが重要になってきた。介護福祉学科1期生の桜沢(旧姓中村)由佳氏は、12年間の介護老人保健施設での勤務経験と多くの卒業生との関わりを踏まえて、卒業生の多くは、「卒業後1年が経ち、1番の悩みは現場の介護を変えたいのに信頼できる上司や先輩が少なく相談しにくい。また、意見が言える雰囲気ではない」と指摘している²⁾。しかしながら、介護福祉学科卒業生が互いに意見を交し合う場は整備されていなかった。現状では、松本短期大学同窓会という大きな組織のなかで介護福祉学科卒業生による同窓会活動は機能していなかったのである。

ただ、介護福祉学科卒業生による同窓会活動ではないものの、唯一、毎年行われている卒業生同士の交流に「ホームカミングデー」がある。これは、毎年8月に昨年度の卒業生が母校に集い、近況報告などを行うもので、本学介護福祉学科主催により行われている。しかし、このホームカミングデーは、あくまでも「昨年度の卒業生」が参加の対象となっており、その他の卒業生が参加しにくい状況にあった(参加してもよいが、通知も出していないため、その他の卒業生の参加は皆無に等しい)。

ところが、最近では、前述の桜沢由佳氏が指摘するように、「ホームカミングデー以外に気楽に集まれる機会がほしい」「介護福祉学科の卒業生同士で勉強会をやりたい」というように、卒業後も継続し

たサポートの場を求める卒業生の声がかれるようになってきた。

また、筆者自身は、卒業生同士だけでなく、卒業生と在校生とのつながりが深まる活動も必要ではないかと考えていた。筆者が担当した2006年度のゼミ生も、4月当初から「卒業生から直接介護の現場の話を知りたい」と卒業生との交流を強く要望していた。その要望をすぐに叶えることはできなかったが、筆者は、ゼミ生と協力して企画し、2007・2008年度とゼミの時間に「卒業生との交流会」を行った。具体的には、介護老人福祉施設と介護老人保健施設で働く2人の卒業生を招き、現在の仕事内容や就職するにあたって準備したことなどを聞くことができた。ゼミ生からは「どのような介護をしたいのか、自分の介護観が大切。就職試験にも役立ちそう」「改めて介護の仕事でいこうと思った」などの感想が聞かれ、卒業生を通して学ぶことは多かったようである。

さらに、筆者のゼミでは、2008・2009年度と「卒業生が働く職場(介護老人保健施設)見学と学習会」も実施した。こちらも「実習ではゆっくり聞けないことも、卒業生だから聞くことができた」「卒業生が働く姿を見て刺激を受けた」など、ゼミ生から高い評価を得ている。

このように、卒業生同士だけでなく卒業生と在校生とのつながりも求められている。にもかかわらず、そうした取り組みが同窓会では行われていなかった。一卒業生や一教員だけの取り組みには、限界がある。同窓会活動も同じといえる。約1500人にもものぼる介護福祉学科卒業生を対象とした活動を展開しようとするならば、どうしても形だけではなく、機能する組織が必要であった。

II. 介護福祉学科同窓会設立の過程

以下、介護福祉学科同窓会設立までの取り組みについて、時間的経過に沿って6つに整理した。

1. 同窓会長との出会いと同窓会改編構想

筆者ら介護福祉学科卒業生の多くが、卒業生同士や卒業生と在校生とのつながりの必要性を考えていた時、その契機は訪れた。2006年6月、介護福祉学科長(現学長)の山崎健治教授から、松本短期大学同窓会役員就任への推薦の声がかかった。筆者はこれを機に、さっそく同窓会長の手塚富貴子氏(幼児教育学科1期生)と面談した。手塚富貴子氏からは、「2006年度看護学科が設立され、今後卒業生もますます増えていくことから同窓会全体として活動しにくくなる可能性があり、今後は各学科の卒業生で同窓会を組織し、それぞれの学科の卒業生が中心となった活動を展開していく必要がある」との構想を聞くことができた。その上で手塚富貴子氏は、「現在の同窓会則を大幅に改正し、各学科の卒業生が活動しやすい基盤を作らなければならない」と強調して述べられた。

もともと筆者は、この手塚富貴子氏の同窓会改編構想とほぼ同じ構想を抱いていたため、これに賛同した。そして、各学科の同窓会設立に向けて手塚富貴子氏ら同窓会役員とともに動き出した。

2. 同窓会会則改編委員会の発足と同窓会組織の見直し

既存の同窓会則には、各学科の卒業生が同窓会活動を展開する旨が記載されていない。そのため、仮に各学科で同窓会活動を行ったとしても、それぞれに予算を割り当てることさえも難しい状況にあった。そこで2006年7月、既存の同窓会則を各学科の同窓会設立に向けて改編するため、「同窓会会則改編委員会」(以下、会則改編委員会)を発足させた。その際、筆者は、前述の桜沢由佳氏に懇願し、筆者とともに介護福祉学科代表として会則改

編委員会に参加してもらった。会則改編委員会のメンバーは、桜沢由佳氏と筆者を除いてはすべて幼児教育(保育)学科卒業生で、同窓会長の手塚富貴子氏をはじめ、副会長の臼井みはる氏(幼児教育学科1期生)ほか、計8人で構成した。ちなみに看護学科については、1期生が入学した年度であるため、会則改編委員会が中心となって、看護学科1期生が卒業時に看護学科同窓会を運営していけるように助けていくことになった。

会則改編委員会は、1~2ヶ月に1回程度の割合で開催した。2006年度は、信州大学、長野県短期大学、淑徳短期大学など、他の大学・短大の同窓会則を集積し、会則改編に向けた資料とした。2007度は、まず、それらの資料を参考にして「同窓会旧組織図」を見直し、「同窓会新組織図」を作成した(図2)。具体的に

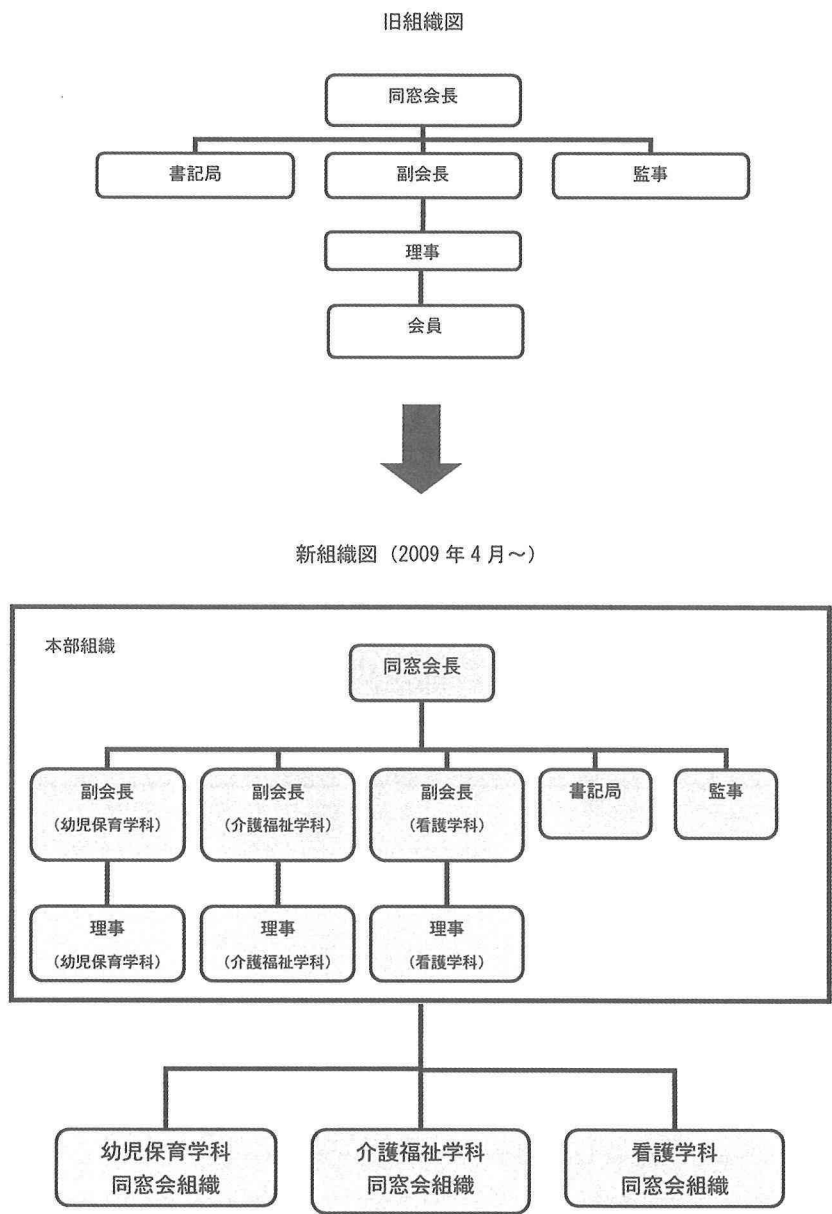


図2 松本短期大学同窓会の旧組織図と新組織図

は、①同窓会の本部組織とは別に、新たに各学科の同窓会組織を設け、②各学科の代表が同窓会全体の副会長を担うようにした。つまり、幼児保育学科同窓会長、介護福祉学科同窓会長、看護学科同窓会長の3人が同窓会全体の副会長も兼務することで、各学科の意見を同窓会活動により反映しやすい体制へと変更したのである。

次に、「旧同窓会則」を見直して「新同窓会則」の作成に入った。新たに設けた「第6章：組織 第16条」では、「同窓会活動の円滑な発展と交流の促進の為、卒業学科ごとに組織をもうける」とした上で、「卒業学科ごとに細則を定める」とした。

会則改編作業の際、メンバーが重視した点は、①同窓会則(同窓会組織図を含む)は詳細にしすぎず、どの同窓会員が読んでも(見ても)わかりやすいこと、②活動内容を限定するような記載は避け、自由度の高い活動が展開できるように配慮することであった。

会則改編委員会での見直し作業は順調に進んだ。実は、桜沢由佳氏と筆者は、これとは別に、介護福祉学科卒業生を対象にした介護福祉学科同窓会設立に向けての独自の取り組み(プロジェクト)を2つ企画して準備を進めていた。

3. 卒後交流の内容検討に向けた調査の実施—介護福祉学科同窓会設立準備プロジェクト①

1) 調査目的と調査対象者の検討

介護福祉学科同窓会設立準備に向けて、桜沢由佳氏と筆者は、卒業生が求める卒後交流の内容を事前に把握したいと考えた。なぜなら、桜沢由佳氏や筆者といった一部の卒業生が活動内容を決めるのではなく、できる限り多くの卒業生の声を反映した同窓会活動を展開したかったからである。

ただし、同じ卒業生といえども、2007年度の時点で、1～13期生まで幅広く存在する。留年などせず無事に短大まで卒業した場合で比較しても、12年の隔たりがある。職場経験の違いなどによって、求める卒後交流の内容には違いが生じるのではなかろうか。この点を考慮しないまま、卒業生が求める卒後交流の内容を検討することは危険といえる。

そこで、桜沢由佳氏と筆者は、対象を卒後1年目の卒業生に限定した上で、彼(女)らが求める卒後交流の内容検討を行うことにした。理由は、「新人介護職員は、それぞれの目的や目標をもって就職するが、実際は自分自身がやりたかったことが職場の中では見出しにくい」「新人介護職員は教えられることに慣れ、自分で考え、悩むプロセスが不十分」との指摘があり³⁾⁴⁾、社会人1年目のいわゆる新人卒業生をまずはフォローしていくことが必要と考えたからである。

2) 調査の実施

介護福祉学科2006年度卒業生100人のうち卒後5ヶ月目にあたる2007年8月4日の第13回ホームカミングデーに参加した、新人介護福祉士71人を対象に自記式質問票調査を実施した。

主な質問内容は、①卒後交流への関心度、②卒後交流で行いたい内容(卒後研修、食事会、旅行、温泉、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、卓球、ボーリング、カラオケ、語学教室、その他)とし、それぞれ4段階の選択肢で回答してもらった。②については、他大学・短大で行われている卒後交流に加え、本学にあるサークルも参考にして決めた。

なお、倫理的配慮として、調査の趣旨説明を行い、これに同意を得られる人から匿名で回答を得た。その結果、参加した71人の98.6%にあたる70人(女性58人、男性12人、平均年齢20.5±0.8歳)から回答を得られた。以下、この70人から得られたデータを示す。

3) 調査の結果

卒後交流への関心度では、「非常にある」が69人中23人(33.3%)、「少しある」が69人中31人(44.9%)で、関心がある人が全体で約8割を占め、関心の高さがうかがえた(図3)。

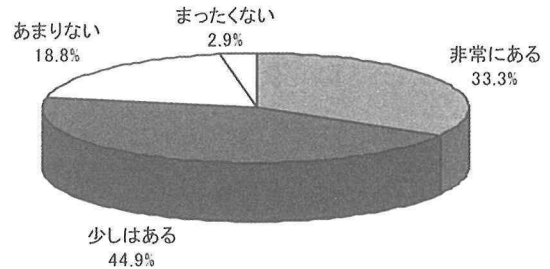


図3 卒後交流への関心度

卒後交流で行いたい内容について「強くそう思う」の割合が高い順に並べた(図4)。その結果、ベスト5は、1位が「食事会」の70人中38人(54.3%)、2位が「ボーリング」の70人中23人(32.9%)、3位が「温泉」の70人中22人(31.4%)、4位が「カラオケ」の69人中18人(26.1%)、5位が「旅行」の70人中18人(25.7%)であった。1位の「食事会」は2位の「ボーリング」よりも約20%ポイントも高かった。「卒後研修」は69人中15人(21.7%)で7位となった。最も割合が低かった内容は、「語学教室」の69人中6人(8.7%)であった。

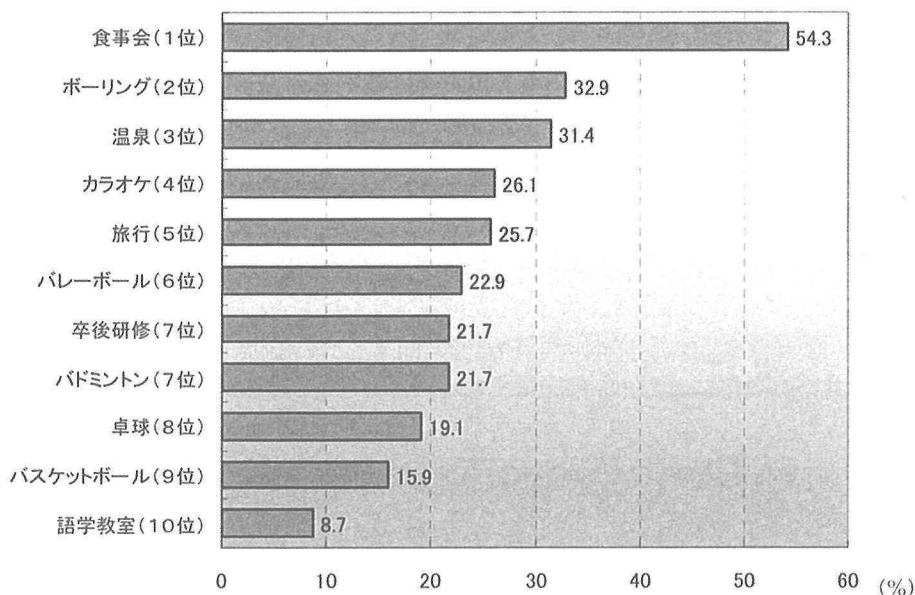


図4 卒後交流で行いたい内容

4) 卒後交流の内容を検討する際の3つの示唆

以上は、2006年度の卒業生から得られたデータであるため、今後、他年度の卒業生の結果も加えるなど、さらに検討する余地はあるものの、この結果から、卒後交流の内容を検討する際に配慮すべき3つの示唆を得ることができた。それは、①食事会やボーリング、温泉など、卒業生同士が気軽に語り合える場の必要性、②日頃の心身の疲れを癒したり、ストレスを発散したりすることができる内容の必要性、③語学教室やバスケットボールなど、得意不得意が生じやすい内容ではなく、全員が気軽に行え、楽しめる活動を行う必要性である。

卒業生のなかには、職場の人間関係や給料といった問題だけでなく、「仕事に自信がもてない」と悩む人も多い。本調査と同一対象者に対して行われた筆者による別の調査(2007年)では、卒後5ヶ月目の新人介護福祉士が「自信がないと強く思っている」仕事内容は、食事介助、着脱介助、排泄介助などの直接的日常介護では7~15%で下位にとどまるのに対し、ターミナルケアが62.1%、ケアプランの作成が51.5%、医療知識・技術の活用が48.5%と多く、上位3位を占めていた⁵⁾。

その意味で、卒後交流の内容として卒後研修も大切である。ただし、卒後研修だけを単独で行うのではなく、卒後研修後に食事会を設定する、卒後研修にゲーム性のある内容を取り入れるなど、実施方法を工夫して参加者が互いに語って楽しめるようにすることも大切になってこよう。いずれにしても、前述した3つの示唆を参考にして、卒後交流の内容を検討していくことが必要である。

4. 卒業年度を問わない卒後交流会の開催—介護福祉学科同窓会設立準備プロジェクト②

1) 卒後交流会開催に向けて

2007年8月4日のホームカミングデーでの調査(介護福祉学科同窓会設立準備プロジェクト①)と合わせて、午後のプログラムとして介護福祉学科卒業生による卒後交流会を開催できないか、と筆者は考えた。理由としては、①卒業年度を問わない卒業生同士の縦横のネットワークを深めたかったこと、②介護福祉学科同窓会設立に向けて同窓会が動き出していることを知ってほしかったことがあげられる。この考えを介護福祉学科の学科会で提案したところ、介護福祉学科の先生方も快く賛成してくれた。

幸いにも、2007年6月から介護福祉学科の共同研究で介護福祉学科卒業生全員を対象とした介護労働の実態について郵送調査することになっており、それに便乗する形で卒後交流会の開催通知を一緒に郵送することができた(1220人分)。

なお、開催通知の文面には、介護福祉学科同窓会設立に向けての趣旨や検討中の新同窓会組織図も記載し、単なる開催通知ではなく、介護福祉学科同窓会設立に向けて準備している様子を多くの卒業生に周知する機会となるよう工夫した。

2) 卒後交流会の目的と実施内容

介護福祉学科の先生方の協力もあり、2007年8月4日、ホームカミングデー終了後の午後のプログラムとして、卒後交流会を開催することができた。目的は次の3点である。①介護福祉学科同窓会設立にあたっての経緯を説明して協力を得る。②介護福祉学科同窓会の活動指針を検討するにあたり卒業生

の意見を参考に、③年齢を超えた卒業生同士のつながりを促進する。

当日は、①山崎健治教授による基調講演(「貧困と心の問題」)、②桜沢由佳氏による介護福祉学科同窓会の設立経緯についての説明、③教員も交えての意見交換会を実施した。また、看護学科開設に伴い増築された「新校舎を見たい」との声も多かったため、新校舎の見学会も合わせて行った。

3)意見交換会で発せられた卒業生の声

卒後交流会に参加した卒業生は21人(1期生1人, 2期生1人, 4期生2人, 6期生1人, 7期生1人, 8期生1人, 9期生3人, 10期生4人, 11期生6人, 不明1人)であった。当初予定していた35人よりも14人少なかった。理由としては、卒業生の多くが不規則勤務も担う介

護職員であること、なかには結婚して多忙な日々を送っている卒業生もいたことなどが考えられ、急遽、当日参加不可能となってしまった人もいたと思われる。ただし、幸いにも、教員は筆者を除いて6人(山崎健治教授、尾台安子学科長、百瀬ちどり教授、六波羅美代前教授、渡辺千枝子准教授、丸山順子准教授)が参加してくださり、恩師との何年ぶりかの再会に感激する卒業生もいた。

意見交換会では、1~11期生までが集う異年齢集団のなかで、それぞれの卒業生が自らの職場経験を踏まえた意見を発することができた。普段は聞くことができない他施設などの労働実態や他の卒業生が抱く介護への思いに触れる機会となった。以下、6人の卒業生の声を紹介する(表1)。

表1 6人の卒業生の声

卒業生	勤務先または職種	卒業生の声
A氏 (4期生)	特別養護老人ホーム 介護職員	働くなかで自分自身をコントロールすることの難しさを実感している。来年度以降もぜひこのような会を開いてほしい。なかなかこういう機会を開いてもらわないと母校に行く機会がないので。
B氏 (8期生)	介護老人保健施設 介護職員	老健利用者の寝たきり度があがり、本来の老健の使命が果たせなくなってきているように思う。今後も老健で勤めていく自信がなくなったが、山崎先生の話で救われた。
C氏 (10期生)	病院 介護職員	人員不足で困っている。職場環境が改善されない。どうしたらよいのか? 先生方からアドバイスをもらいたい。
D氏 (11期生)	介護老人保健施設 介護職員	スタッフの働く姿勢、ケアの統一感もなく、これでいいのか悩む。自分もその雰囲気流されてしまっているが、まずは自分から変わらなければならないと思って努力してはいるものの、日々不安である。職場内で意識統一するにはどうすればいいのか?
E氏 (9期生)	介護認定調査員	今は、直接介護にはたずさわっていないが、様々なご家庭を訪問することで、(家庭での)介護の現状を見ることができている。
F氏 (2期生)	無職	10年前に学んだ知識がいまだに役立っている。介護福祉学科の学生数が減っていると聞いてショックを受けた。学校をもっと盛り上げてほしい。

4)卒業生の声を通しての考察

卒業生のなかには、介護職の人材不足やケア理念の不一致で悩む人もいた。「高齢者介護施設で働く職員の精神的健康度は低く、他業種と比較してハイリスク群が多く、早急なストレス支援が望まれる」との指摘もあり⁶⁾、そうした卒業生への支援は重要である。ただ、人材不足もケア理念の不一致も、一個人の努力だけではどうすることもできない。施設のPR活動や卒後研修など、組織としてどう改善に向けて取り組めるかが問われている。同時に「実際に働く介護職員は、自らの労働状況を訴え、改善していく手立てを持ちがたいため、施設の枠を超えた組織が必要」との指摘があるように⁷⁾、職場で孤立して

悩み続けてしまう前に、卒業生同士が気軽に自分の思いを寄せられる、職場とは別の場を用意する必要がある。卒業生を孤立させてはいけない。卒業生の声を通して、母校はもちろん、同窓会にも卒業生を支える役割期待が課されていることを再認識した。

このように、卒業生はモヤモヤした悩みをもっている。では、その悩みをスッキリさせるために、同窓会として何ができるのであろうか。

桜沢由佳氏は、介護福祉学科同窓会の設立経緯について説明するなかで「介護現場で働いていた時、すごく悩んだことがあって、その時に、解決策のヒントをくれたのは、介護現場に勤めていない仲間からの一言でした」と述べている。確かに介護に専念

するあまり視野が狭くなって、その悩みから抜け出せない卒業生もいる。その時、同じ介護職で互いに考え合って、その悩みから抜け出す方策を見出すのも1つの手である。しかし、それでも解決策を見出せない場合は、桜沢由佳氏が述べているように、他の専門職や業界の話聞くことも有効と思われる。なぜなら、そうすることで、介護職の自分では気づくことができなかつた様々な面が見えてきたり、新たな発想が得られたりして、そこから解決につながっていくことも考えられるからである。卒業生同士の交流も視点を変えれば、多様な内容になるし、その効果も変わってくる。今後は、介護職の卒業生がそれ以外の仕事にたずさわっている卒業生と相談できる機会を増やすなど、職種を超えた卒後交流も必要になってくると思われる。

5. 「介護福祉学科同窓会」設立と役員決定

2007年度に実施した2つの介護福祉学科同窓会設立準備プロジェクトは、介護福祉学科同窓会設立の動きを加速させた。2007年12月には、2006年から進めていた会則改編委員会での新同窓会組織図と新同窓会則が完成した。そこで、2008年2月17日に松本短期大学同窓会総会を開き、約40人の卒業

生や関係者が参加するなか、同窓会則の改正が審議された。当日は、筆者が浦沢正也氏(幼児保育学科22期生)と一緒に議長を務め、賛成多数で同窓会則の改正が承認された。これにより、2009年4月1日に「介護福祉学科同窓会」が正式に設立される運びとなった。

これを受けて、介護福祉学科同窓会設立準備プロジェクトの第3弾を企画する予定であった。しかし、設立に向けての中心人物である桜沢由佳氏と筆者がそれぞれの理由で動きがとりづらくなり、その思いを断念せざるを得なかつた。ちなみに筆者の理由の1つは、改正社会福祉士及び介護福祉士法施行に伴う2009年度からの介護福祉士養成校新カリキュラム導入の準備であった。

結果的に2008年度は、介護福祉学科同窓会の役員決めに専念した。その結果、介護福祉学科同窓会の会長には柳澤佳澄氏が就任し、副会長を桜沢由佳氏に、顧問を尾台安子学科長にお願いすることになった。筆者は、庶務として同窓会の企画・運営を側面から支える役割を担うことにした。その他の役員は、表2のとおりである。2009年2月7日には、介護福祉学科同窓会役員顔合わせ会を行った。

表2 介護福祉学科同窓会役員一覧表

(敬称略)

担当	氏名	勤務先または在学先
会長	柳澤佳澄 (1期生)	介護老人保健施設ロングライフ塩尻
副会長	桜沢由佳 (1期生)	
庶務	福田明 (4期生)	松本短期大学介護福祉学科
理事	有賀裕幸 (4期生)	介護老人保健施設ローズガーデン
理事	黒木(旧姓土屋)絵美 (9期生)	松本短期大学看護学科在学中
理事	北澤公章 (13期生)	介護老人保健施設ローズガーデン
書記	小坂みづほ (1期生)	松本短期大学介護福祉学科
監査	百瀬弘章 (3期生)	介護老人保健施設ロングライフ塩尻
顧問	尾台安子 (介護福祉学科長)	松本短期大学介護福祉学科

6. 介護福祉学科同窓会の誕生と始動に向けて

2009年4月1日、「介護福祉学科同窓会」が誕生した。ただし、活動を始動するためには、次の3点を押さえる必要があった。それは、①介護福祉学科同窓会の指針、②活動内容、③予算である。そこで、2009年4月18日に行われた2009年度松本短期大学同窓会定例理事会において、①介護福祉学科同窓会の指針となる「介護福祉学科同窓会細則」(資料1)、②平成21年度介護福祉学科同窓会事業計画案、③平成21年度介護福祉学科同窓会予算案を提示して審議にかけた。この3点セットには、介護福祉学科同窓会設立準備

のなかで聞かれた卒業生の声を可能な限り反映させた。そして最終的には、介護福祉学科同窓会長の柳澤佳澄氏との確認作業を得て作成された。審議の結果、幼児保育学科同窓会役員の方々への承認も得られ、いよいよ具体的な活動を展開する段階となった。

Ⅲ. 今後の展望

以下、介護福祉学科同窓会活動の今後の展望について現状も踏まえて3点述べる。

1. 職場別相談セミナーの継続的な実施

2009年7月4日、今後の介護福祉学科同窓会活動の打ち合わせのため、介護福祉学科同窓会役員会議が開催された。介護福祉学科同窓会設立以前の2007年8月4日に、すでにプロジェクトの一環として卒業生同士による卒後交流会は行われていたため、今度は「卒業生と在校生との交流を」を合言葉に活動内容を企画した。

具体的には、2009年10月13日、介護福祉学科同窓会設立後、初の企画となる「職場別相談セミナー」を開催した。これは、介護や医療の職場で働く卒業生が、在校生に対して、仕事内容や介護の魅力などを伝える、在校生が卒業生に対して実習や就職に関する相談をするなど、双方の学びと交流を促進する目的で行われた。なお、介護福祉学科1年生の生活交流演習の時間を活用して実施したため、1年生は54人参加したが、2年生の参加は3人とどまった。

当日は、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、病院、グループホーム、社会福祉協議会、デイケア・デイサービスで働く（働いていた）6人の卒業生が母校を訪れた。それぞれ6つの会場にわかれての分科会形式を採用し、1つの分科会には、5～12人の学生が集まった。なお、学生には事前にアンケート調査を実施し、希望する分科会に参加できるよう配慮した。また、飲み物やお菓子も用意し、気軽に話し合える雰囲気づくりに努めた。

参加した学生からは、「厳しいこともいわれたけど、現場で働く先輩のようにたくましくなりたい！」「給料の話聞いた時、やはり手取りが少ないと感じた。しかし、それ以上にやりがいがあり、仕事が楽しいので、介護福祉士という仕事にさらに関心をもった」「現場で働いている人の話は現実味があり、とても

タメになった。心のつながりができる素晴らしい職業だと知り、これからの勉強や実習を頑張ろうと思った」「『介護にゴールはない。常に向上心を！』という言葉に心ひかれた」など、介護福祉士を目指す気持ちを後押しするような肯定的な意見が多く聞かれた。

その証拠に、終了後に実施した介護福祉学科1年生への自記式質問票調査においても、職場別相談セミナーに参加して「非常に満足」が54人中26人(48.1%)、「ある程度満足」が54人中24人(44.4%)という結果になった(図5)。実に9割以上が満足していたことになる。

一方で、54人中4人(7.4%)が「少し不満」と職場別相談セミナーを評価した。理由を尋ねると(複数回答)、「質問したが、丁寧に答えてもらえなかった」(3人)、「もう少し質問の時間がほしい」(2人)、「卒業生の話が途中から自分の職場の話ばかりになった」(1人)、「違う職場の話も聞きたい」(1人)と回答した。なお、「かなり不満」と回答した人はみられなかった。

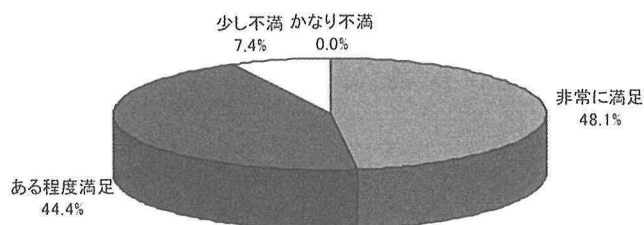


図5 職場別相談セミナーの満足度

また、「今後、希望する卒業生との交流」についても質問した。その結果、最も割合が高かったのは、「職場別相談セミナー」で64.2%であった(表3)。これは、2位の「現場の介護技術」の35.8%よりも約30%ポ

表3 介護福祉学科1年生が希望する卒業生との交流

N=53(複数回答)

順位	希望する卒業生との交流内容	人数	割合
1位	職場別相談セミナー	34人	64.2%
2位	現場の介護技術	19人	35.8%
3位	マナー教室	15人	28.3%
4位	スキルアップ講座	11人	20.8%
5位	施設訪問による勉強会	7人	13.2%
6位	その他	1人	1.9%

その他の内容は、「介護福祉士に共通して大切なことを話し合う」であった。

イント高い。

職場別相談セミナーは、普段の授業では聞くことができない、あるいは実習中だとゆっくり聞けない、卒業生の貴重な情報や卒業生の思いを直接聞ける

チャンスでもある。それだけに今後も、継続的に職場別相談セミナーを開催していきたいと考えている。その際は、今回の職場別相談セミナーでの反省を活かし、担当する卒業生も職場の出来事などをわかり

やすく在校生に伝える、介護の魅力が在校生に知ってもらうための工夫をするなど、自らのプレゼンテーション能力を高める努力が必要と思われる。なお、職場別相談セミナーの様子が新聞記事に掲載されたので、関心のある方は一読されたい(「市民タイムス:2009年10月14日」)。

2. 介護福祉学科同窓会のPRの必要性

あるサービスの利用を促進させたり、人材を集めたりするには、様々な方法がある。そのなかの1つにPR活動がある。現在、松本短期大学同窓会をPRする取り組みは、ホームページと同窓会報の2本立てとなっている。

実は筆者は、松本短期大学ホームページリニューアル委員会の1人として、本学ホームページの大幅な変更作業にたずさわった。そのなかで、上條節子教授や生田恵子前教授をはじめ、他の委員と重視したことが、学内や高校生向けページの充実だけでなく、卒業生や地域住民とのつながりが見えるページを追加することであった。その一環として、新たに同窓会のページを盛り込み、同窓会長の手塚富貴子氏に同窓会について紹介していただいた。

筆者は、多くの高校生や社会人が本学に関心をもってほしいと思っている。そのためにも、①高校生を含めた地域住民へのPR活動と、②卒業生を含めた本学の組織的な取り組みが見えることが大切だと考えている。特に②は、卒業後の進路(出口)とも関係する。例えば、介護福祉士を目指す高校生にとって、将来、働きたい施設などに多くの卒業生が就職し、その卒業生が学校とネットワークを組んで、在校生への就職相談も実施している本学の様子を知れば、本学介護福祉学科への進学に安心感がプラスされると思われる。その意味でも、今後、本学ホームページの同窓会ページのなかに、さらに各学科同窓会のコンテンツを作成し、それぞれの学科同窓会の取り組みが多くの人たちに見える環境を整えていきたいと考えている。

同窓会報は、2006年度の看護学科開設を記念して、1978年以来28年ぶりに復活した。現在、在校生や卒業生、教職員などに対して、年1回のペースで発行されている。内容は、特集、卒業生の取り組みの紹介、恩師との対談、母校の最近の様子などとなっている。

介護福祉学科卒業生の関係では、2007年度号に桜沢由佳氏が「介護福祉現場の実状」を、2008年度号に安曇野市社会福祉協議会ボランティアコーディネーターの岩淵綾子氏が「私の身の上話」を、2009年度号に介護福祉学科同窓会長の柳沢佳澄氏が「会長就任にあたっての挨拶」を、筆者が「介護福祉学科同窓会—後輩に向けて職場別相談セミナー

を開催」を記載した。今後は、「介護福祉学科同窓会ニュースレター」(仮称)を作成し、介護福祉学科同窓会会員のみならず、会員が多く働いている施設や事業所にも配布したらどうか、という意見もある。

同窓会報編集委員会からは、「記事が集まらなくて困る」との声を聞く。今後も、多くの人に、母校や同窓会をPRしていく必要がある。合わせて、介護福祉士をとりまく現状(課題だけでなく、介護の魅力といったプラス面)も伝えていく必要がある。そのためにも、ぜひ、多くの卒業生に同窓会報への積極的な参加(依頼時の原稿記載あるいは投稿記事)を期待したい。

3. 母校と同窓会の協働による国家試験対策講座開催に向けて

1987年5月に社会福祉士及び介護福祉士法が制定され、介護福祉士が誕生した。そして25年後の2012年度(2013年1月の第25回介護福祉士国家試験)からは、介護福祉士養成校の学生も卒業前に介護福祉士国家試験の受験が必須となる。仮に国家試験に落ちた場合、名称独占という性格から「介護福祉士」を名乗ることはできない。その代わりに「准介護福祉士」と位置づけられる。「准介護福祉士」も「介護福祉士」同様に介護職として介護労働に従事することは可能である。

しかし、「介護福祉士」は正規職員に、「准介護福祉士」は非正規職員に、という雇用形態になる可能性も考えられる。確かに国家試験に落ちたのだから、非正規職員となるのも仕方ないという意見もあるだろう。ただ、筆者が危惧するのは、非正規職員の「准介護福祉士」が正規職員の「介護福祉士」と同じ時間・同じ内容の仕事を行うにもかかわらず、賃金などの待遇面で差をつけることがあるのではないかと、いう点である。介護職の人材不足が叫ばれるなか、すでに非正規の介護職員が正規の介護職員よりも給料が低いにもかかわらず、利用者へのサービス体制を維持するために、正規職員と同じあるいはそれ以上、無理して働かざるを得ない、との情報も聞く。

こうした状況から考えても、介護福祉士養成校の果たすべき役割は、学生の国家試験合格へと比重を移していく必要がある。同時に、仮に「准介護福祉士」となって就職したとしても、翌年の国家試験では必ず合格するように各職場との連携を深めていく必要もある。幸い本学介護福祉学科の卒業生は、毎年90%以上が介護福祉関係の職場(介護老人福祉施設と介護老人保健施設が合わせて60~70%)に就職している。この実績と卒業生同士のネットワークを活用しない手はないと考える。

具体的には、国家試験を受ける在校生と惜しくも

「准介護福祉士」となってしまった卒業生に対し、母校の教職員と卒業生(介護福祉士)が運営と講師役を担い、協働で国家試験対策講座を開催することはできないだろうか。もし、それが可能になれば、次の3点のメリットも期待できる。①親しい先生や卒業生が講師として教えることで、リラックスした雰囲気、不明な点を聴きやすい。②同窓会費の活用に加えて母校を会場として行うことができれば、民間の受験対策講座の費用よりも格安で済む。③母校の教員・現場の介護福祉士である卒業生と受講する在校生・准介護福祉士の卒業生が相互に教え・教わり合うなかで、在校生と卒業生と母校(教職員)とのネットワークがさらに深まり広がる。

おわりに

以上、介護福祉学科同窓会の設立背景、設立までの過程、今後の展望について述べてきた。思えば、介護福祉学科同窓会設立までの道のりは長く、2006～2009年という3年の月日を要した(資料2)。筆者は、そのなかで、多くの卒業生と関わる機会を得た。なかには、筆者自身も「知らなかった」卒業生も多く、その卒業生と語り合うなかで、自分自身の視野を広げられた。また、普段は意識しないが、同じ介護福祉学科卒業生が周囲にいることを実感でき、安心感を得ることもできた。

確かに介護福祉学科でともに学び・交流した仲間は、かけがえのない同志となる。しかし、それは2年間のなかで得られたものである。人生というスパンで考えた時、同じ学年だった人同士の交流を超えて、もっと他の卒業生との交流や在校生と関わる機会を増やしていく必要があるのではなかろうか。

今後、さらに多くの卒業生が同窓会活動に参加することを期待するとともに、同窓会活動を1つのきっかけとして明日への原動力としてほしい。

長野県内はもちろん、全国で活躍する松本短期大学介護福祉学科卒業生は多い。その数は今後も増えていく。介護福祉学科同窓会は、今日よりも明るい明日に向かって、これから先も卒業生と卒業生、卒業生と在校生、そして卒業生と母校をつないでいきたい、と考えている。

引用文献

- 1) 厚生労働省:介護福祉士養成施設の定員充足率の推移, 厚生労働省資料(2009)。
- 2) 松本短期大学同窓会:松本短期大学同窓会報, 2007年度号(2007)。
- 3) 岡本晴美・中村公三・新井康友ほか:次世代を育てる福祉教育, 総合社会福祉研究, 第32号:60(2008)。
- 4) 篠崎人理・土森美由紀:お年寄りと向き合い, 自

分自身と向かい合うべきのこグループでの新人研修の試み, ふれあいケア, 13(3):24(2008)。

- 5) 拙稿:介護職員の卒後教育・研修の実態と取り組みに関する研究(2009)。
- 6) 高齢者介護施設職員の精神的健康度に対するワークストレスの認知的評価の影響, 久留米大学心理学研究, 第7号:39(2008)。
- 7) 笹屋真由美・安永龍子・森田婦美子:介護福祉士の労働環境と就業に関する一考察, 奈良佐保短期大学紀要, 第15号:45(2007)。

参考文献

二木立:日本福祉大学での教育と研究と校務の23年, そして先へー専門演習指導を中心として, 日本福祉大学研究紀要, 第117号:115-139(2008)。

資料 1

介護福祉学科同窓会細則

松本短期大学同窓会則第 6 章第 16 条（組織）及び資料（同窓会組織図）に則り、以下のとおり介護福祉学科同窓会組織をもうけ、細則を定める。

1. 目的

介護福祉学科同窓会の目的は次の 3 点である。

- 1) 卒業年度を問わない、介護福祉学科卒業生の縦横のネットワークを広める。
- 2) 介護福祉学科卒業生と在校生、教職員とのつながりを深める。
- 3) 1) 2) を達成するための事業を計画・運営する。

2. 会員

会員は次の通りとする。

- 1) 介護福祉学科卒業生
- 2) 介護福祉学科在校生
- 3) 介護福祉学科現旧教職員

3. 役員

介護福祉学科同窓会に次の役員を置く。

- 1) 介護福祉学科同窓会会長
- 2) 介護福祉学科同窓会副会長
- 3) 介護福祉学科同窓会庶務係（会計含む）
- 4) 介護福祉学科同窓会理事
- 5) その他事業等に応じて必要な役員を置くことができる。

4. 事業

事業は大きく 3 つに分けられ、それぞれ計画・運営される。

- 1) 卒業生に向けての事業
- 2) 在校生に向けての事業
- 3) 1) と 2) 双方に向けての事業

5. 会計

- 1) 事業計画案に則り、予算案を策定する。
- 2) 会則第 11 条に基づき、必要な手続きを踏み、予算額を定める。
- 3) 必要な手続きを踏み、収支報告書を作成し、監査を受ける。

6. 細則の変更

本細則は、必要に応じて変更することができる。

資料 2 松本短期大学と松本短期大学同窓会と介護福祉学科同窓会の動向（1970～2009年度）

年度	松本短期大学	松本短期大学同窓会	介護福祉学科同窓会
1970 (S45)	学校法人松本学園設立認可(12/28)		
1971 (S46)	松本保育専門学校開校(4/1)		
1972 (S47)	松本短期大学開学 幼児教育学科開設(4/1)		
1973 (S48)		松本短期大学同窓会設立準備委員会発足(4月) 母校入学式に同窓会長参列開始(4月) 学園祭「おとぎ祭J」への援助開始 母校卒業式に同窓会長参列開始(3月) 松本短期大学同窓会会則制定(4/1) 松本短期大学同窓会設立(4月)	
1974 (S49)			
⋮			
1993 (H 6)	介護福祉学科開設(4/1)		
1995 (H 7)	専攻科福祉専攻開設(4/1)	同窓会会則一部改訂・施行(4/1)	
⋮			
2000 (H12)		同窓会「創立30周年記念 会員名簿」発行(12/25)	
⋮			
2004 (H16)	幼児教育学科を幼児保育学科へ名称変更		
2005 (H17)		看護学科開設に伴う寄付金集め開始(7月～12月) 旧体育館お別れ会(3/4) 母校への寄付金及び時計の贈呈(3/13) 同窓会会則改題委員会発足(7月、以後2007年10月まで1～2ヶ月に1回程度の割合で開催) 「松本短期大学同窓会報」発行再開(7/26、以後年1回発行)	
2006 (H18)	看護学科開設(4/1)		介護福祉学科同窓会設立準備委員会発足(7月)
2007 (H19)			介護福祉学科同窓会設立準備プロジェクト①・②の実施 ①卒業後交流の内容検討に向けた調査(8/4午前) ②卒業年度を問わない卒業交流会(8/4午後) 「介護福祉学科同窓会」設置が正式に決定(2/17)
2008 (H20)		同窓会総会開催(2/17) ホームページ更新により新たに同窓会のページ追加 看護学科学生への同窓会組織に関する説明会(8/1) 同窓会新役員顔合わせ会(2/7) 同窓会組織・事業の検討(3/9) 同窓会新会則施行(4/1)	介護福祉学科同窓会役員顔合わせ(2/7) 介護福祉学科同窓会細則及び事業計画・予算案の検討(3/9) 介護福祉学科同窓会の設立(4/1) 介護福祉学科同窓会細則及び事業計画・予算案の審議(4/18) 介護福祉学科同窓会役員会議(7/4) 第15回ホームページで介護福祉学科同窓会をPR(8/1) 職場別相談セミナー開催(10/13) 「市民タイムス」に職場別相談セミナーの様子が掲載(10/14) 「介護福祉学科同窓会の設立背景・過程と今後の展望」研究紀要:第19号に掲載(3月)
2009 (H21)		2009年度松本短期大学同窓会定例理事会(4/18)	